

『歴史散歩・泉都別府のあゆみ』

別府詩道会 清原 明

淡窓伝光靈流「別府詩道会」（会長永野喜霊）の
発会四十周年記念吟剣詩舞道大会が、今秋十月十三
日、別府市中央公民館において催されました。その
際泉都別府の歴史を、古今の漢詩・和歌で綴った構
成吟として発表しました。

この度「別府史談会」のご好意により、会の皆様
に披露する機会を得ました。ご批評など戴ければ幸
いです。

皆様ようこそ別府へ

ここ別府は、鶴見・由布・高崎の山々、そして美しい
瀬戸の海に囲まれた温泉都市であります。人口一三万に
して二八〇〇余の温泉孔を持ち、その採湯量は一日約十
三万キロリットル（別府八湯）で、その泉質も十種類あ

り、いずれも日本一を誇り、多くの効能を持つ優れた温
泉の郷であります。

温泉の歴史は古く、推定で五万年以前からとも云われ
る。奈良時代の『伊予国風土記逸文』には大國主命が、
別府のお湯を、海底を竹の樋で伊予まで通し、病気の
少彦名命に湯浴させ蘇生させたと言う逸話が記されてい
ます。また、『豊後風土記』には「赤湯泉」「玖倍理湯の
井」など地名を表すものもあります。その頃「豊後の国
白水郎」の詠める歌が万葉集にあります。

くれなるに 染めてしころも 雨降りて
匂ひはすとも うつろはめやも

別府は今、国際観光温泉文化都市として発展を続けて
います。その歴史の歩みを「詩歌の旅」で訪ねることに
致しましょう。

(一) 湧き出づる温泉の源は、周囲に聳え立つ山々に降り
積もる雪や雨が、五〇年の歳月を経て温泉として湧きで
たものです。そこで別府温泉の母なる山「鶴見山」を詠
んだ、小野寛堂作の漢詩を「吟」で紹介することにしま
しょう。

風は青嵐を動かして去り没還らず

石垣原の今日の月影

憶い見る 当年の古戦場

海濤岸を嘯んで 愁腸を洗う

忠魂一たび去って 今何くにか在る

満野の秋風 恨みを惹いて長し

(四) 元和元年(一六一五年) 大阪夏の陣で戦乱は収まり、

徳川二六〇余年の太平の世が続き文教もようやく盛んになり、別府に遊ぶ文人墨客が多く訪れるようになりました。豊後豊岡の儒学者・脇蘭室は、心安らぐ別府の感慨を次のように和歌に託し、また日田の詩聖広瀬淡窓は、その哀歎を絶句につづりました。二題続けてお聞き下さい。

さす月の影さへすみて 湯の下の

冬ともわかぬ 景色なりけり

楼上 離歌歌み

江頭欵乃 新たなり

帰舟 首を回す処

猶見る 欄に倚の人を

(五) 日本の夜明け明治から、大正・昭和時代にかけて別

府は大きく発展しました。別府温泉をこよなく愛し、日本全国はおろか世界にまでその名を広めたのは油屋熊八翁でした。米国に学び、富士山頂に「山は富士、海は瀬戸内温泉は別府」の大標柱を建てたり、日本初のゴルフ場やガイド付き観光バスの地獄めぐりを走らせるなど、熊八翁は別府観光のために日夜奔走しました。大正十五年元フランス大使ポール・クロードルが別府を訪れ亀の井ホテルに宿泊した折り、主人油屋熊八翁に次の詩を贈りました。「吟」と「詩舞」で紹介しましょう。

温かき温泉と 温かきもてなし

わが生命よみがえる

温かき温泉 なごやけき人の心

われ再び別府に来たらん

(六) 大正時代、別府が風光明媚で情緒あふれる温泉の町として全国の人々に知られるようになると、多くの文人歌人が訪れ、艶やかな色香も添えてきました。

福岡の石炭王の妻であった歌人・柳原白蓮は夫と別れ、若き社会運動家宮崎竜介のもとへと走り、その心境を次のように詠んでいます。また、才色兼備の歌人・

九条武子は渡欧した夫のもとを離れ、慈善事業に尽くしながら別府の風情を次のような句に託しました。続けて二首お聞き下さい。

柳原白蓮

「和田津海の 沖に火燃ゆる 火の国に
我ありたそや 思はれ人は」

九条武子

「やはらかき 湯気に身を置く 我もよし
こよひおぼろの 月影もよし」

(七) さて時代は移り、昭和二十年広島・長崎の原爆被災を機に戦争は終わり、ようやく時世は落ち着きました。別府も平和な国際観光温泉文化都市として新たな第一歩を踏み出しました。別府温泉が原爆による難病の治療に役立つということから、日本初めての「原爆温泉センター」も建設され、現在までに七四万人の人々が療養にやっ来ています。また別府には、毎年一〇〇〇万人の観光客が訪れて温泉を楽しみ、緑豊かな自然を眺め、街並みを散策しながら詠まれた俳句も一万三〇〇〇句となりしました。また、平成十三年度NHKが募集した「二十一世紀に残したい日本の風景」と題しての投票では、富士山に次ぎ「別府の湯けむり」が全国で第二位に選ばれました。

ここで、通通信教作の「別府を讚える漢詩」をお聞き下さい。

千仞の清溪 満暈の山
茫茫たる滄海 白雲の間
是処の靈泉 天下に冠たり
樓閣高く臨む かんたん湾

(八) 構成吟「歴史散歩・泉都別府のあゆみ」も「二吟」を残すのみとなりました。わたしども宗家・深田光靈先生が別府のすばらしさを讚えた詩碑が上人ヶ浜公園に建てられています。吟友全員の高らかな合吟で、構成吟を終わらせて頂きます。

鶴嶺雲を排して 碧天に連なり
四辺の地獄 白煙鮮やかなり
車に坐して岳に登れば 霧袖を沾おす
酒を載せて潮に浮べば 月船に満つ
一帯の紅燈 光景を彩り
幾群の浴客 街阡に簇る
泉都別府 天下に冠たり
水軟らかに湯温かにして 麗人を思わしむ

(おわり)

祝 淡窓伝光靈流別府詩道会
発会40周年記念 吟剣詩舞道大会



▲ (写真一事務局長清原 明氏提供) ▼

